

# FLORA KANAGAWA

Jul. 25. 2017 No.84

## 神奈川県植物誌調査会ニュース第 84 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内  
神奈川県植物誌調査会  
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846  
e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp



図1. クジュウツリスゲの花穂 (横浜市 2017.5.15 佐々木シゲ子撮影). 図2. クジュウツリスゲの葉鞘と匍枝 (横浜市 2017.5.15 佐々木シゲ子撮影).

### 横浜市旭区に神奈川県新産のクジュウツリスゲ (カルイザワツリスゲ)

(佐々木シゲ子・和田良子・野津信子)

『神奈川県植物誌 2018』(仮称)の発刊にむけての現地調査として、手薄な旭区を定期的に回り始めたのは、2016年の10月半ばからであった。本来日本海側に分布するセリモドキの生育環境を見せていただきに、その発見者である上原 健さんの御案内で追分市民の森を訪れた。その際、横浜市内にしては、自然が残り、調査もまだ不十分

で未採集種が多いのが気になり、早速その月から本格的な寒さが来る前にと、いつもの仲間と重点的に回ることにした。本来の調査は2017年3月末で終わりであるが、折角始めたので、とりあえず秋までの1年間は続けることとした。

4月中旬、上原さんからワダソウが咲きだしたとお知らせがあったので、調査に出かけた。かつては谷戸田が広がっていたが、現在は盛土がされ、その両脇に流れがある。流水アメニティーとして整備され、夏にはヒマワリ、秋にはコスモスが楽

しめる。そのアメニティーの西斜面の土手を覆っていたヒノキやマツが手入れがされ、枝落としされたため斜面に日が当たるようになり、草刈も行われるようになると、数年前からワダソウが咲くようになったそうである。

その斜面に茎の基部の鞘が濃い赤紫色をしたスゲが疎らに生えていた。長い柄の先に雄小穂があり、雌小穂にも長い柄があり、まだ未熟の状態の果穂が垂れ下がっており、タマツリスゲの仲間であると思われた。タマツリスゲ節のものは、横浜ではコジュズスゲをよく目にする。タマツリスゲは県内の北部や西部に行かないとみられない。『神植誌 01』には、『神植誌 88』の調査時にオオタマツリスゲの貧弱な個体が横浜市緑区で採集されているとある。オオタマツリスゲにしては、長い柄の雄小穂、長い柄が垂れ下がっている雌小穂はいいが、茎が1本づつ這っていて、基部の鞘の濃い赤が気になり、来月まで採集を待つことにする。1ヶ月後の5月15日、ちょうど果穂も熟していたので(図1)、標本にするため一部掘り上げる

と、匍匐枝をのぼしている(図2)。周りを見ると、葉だけのものも含め、広がりつつあるようであった。早速、生命の星・地球博物館の勝山輝男学芸員に見ていただき、神奈川県新産のクジュウツリスゲ *Carex kujuzana* Ohwi と同定して頂いた。その後6月12日に同所に行ってみると、すっかり周りの草丈がのび、その中に埋もれていた。今後、草刈をするなど、生育環境を整え、日が当たるようにしていただくようお願いした。

クジュウツリスゲの分布は岩手県、宮城県、栃木県、群馬県、長野県、東京都浅間山、九州(北部)で、『国 RD2014』では準絶滅危惧種 (NT) である。生育環境は山地の草原や明るい樹林内とあり、長野県の離山では、林内や日当たりの良い斜面に広がって生育していたのを思い出した。追分市民の森を案内して下さった上原 健氏、標本の同定をして下さった勝山学芸員にこの場をお借りし改めて感謝いたします。

標本：横浜市旭区 2017.5.15 佐々木シゲ子・和田良子 KPM-NA0185166.

## ハナハギ属ハナハギについて類

(佐々木あや子)

2014年9月18日、緒方 隆・村中恵子・筆者は伊勢原市日向猪ノ山作業道の調査を行った。その際、作業道沿いでハギ属らしき植物を採集した。この植物は狭い林道を塞ぐように、たくさんの花をつけていた。標本を作り、特に調べることもなく、ツクシハギとして博物館に納めたが、『神奈川県植物誌 2018』(仮称)の執筆に向け、ハギ属の標本を見直したところ、この標本はツクシハギではなくハナハギ属のハナハギ *Campylotropis macrocarpa* (Bunge) Rhed であった。ハナハギについては大橋ほか(2003)に詳しく述べられている。それによると、「本種は1970年代末以降、多分1993年以降に中国から持ち込まれたものと思われる」とある。また、植村ほか(2010)にも掲載されている。県内では秦野市浅間山で採集されたツクシハギとされていた標本もハナハギであった。伊勢原市、秦野市のどちらの生育地も林道沿いの法面であり、道路工事に伴い緑化目的で使われた種子に混入していたものと思われる。

ハナハギ *Campylotropis macrocarpa* (Bunge) Rhed.

モンゴル南部、中国中部以北、朝鮮半島原産。高さ1~2mの低木。若枝、花序軸、葉柄には密に毛があり、花序軸、葉柄に蜜腺がある。托葉は早落性で、葉は3小葉、小葉は楕円形、頂小葉の

長さは4~5cm、幅2~2.5cm、表面は無毛で、裏面は軟毛が密生する。葉腋から、基部の葉より長い花序を出し、多くの花をつける。花は1節に1花だけが付き、長さ1.1~1.2cm、小花柄は長さ1~1.2cm、花弁の基部は白く、先端は赤紫色、竜骨弁の舷部は中央で著しく内曲し、舷部の先は尖る。萼裂片は3角形で、萼筒より短い。



図1. ハナハギ (伊勢原市日向 2014.9.18 村中恵子撮影)。

標本：伊勢原市日向 (ISE-1) 2014.9.18 佐々木あや子 SSA-12124 KPM-NA0177839；秦野市蓑毛 (HAT-3) 2015.9.16 近田あき子 CKD563 KPM-NA0177839.

#### 文献

大橋広好・米倉浩司・小川 誠, 2003. マメ科の新帰化植物ハナハギ. 植物研究雑誌, 78: 54-55.  
植村修二・勝山輝男・清水矩宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹, 2010. 日本帰化植物写真図鑑 第2巻. 174pp. 全農協, 東京.



図 1.4 しべのヤマネコノメソウ (横浜市青葉区寺家ふるさと村 2017.2.20 中島 稔撮影).

## シロバナエンレイソウは箱根に自生しない (木場英久)

生命の星・地球博物館に収蔵されているユリ科の標本の同定を確認していたら、シロバナエンレイソウ (別名ミヤマエンレイソウ) と同定されていた箱根産の2点の標本が、エンレイソウであることがわかった。

どちらの標本にも内花被はなく、外花被も尖っていた。果実も円錐形ではなく球形であった。エンレイソウでは果期の標本でも内花被の一部が残っており、外花被はぼぼりと幅広いことが多い。これらの特徴から、この2点の標本はエンレイソウであると考えられる。

『神植誌 01』では、箱根に白丸の分布点が2個ある。つまり『神植誌 88』のときに採集され、シロバナエンレイソウに誤同定されていて、2001年の植物誌調査のときは、私が同定の際に見落としていたのである。

他の標本庫も含めて、新しい植物誌に引用する予定の箱根産標本はこの2点だけであったので、箱根に分布点がなくなってしまった。箱根の調査経験の多い勝山輝男氏と井上香世子さんに立ち話ではあるが、箱根に自生のシロバナエンレイソウはないかもしれないことを話すと、たしかにそうかもしれないとの返事が得られた。標本がないだけでなく、実際に分布していないのだと思われる。

1988年の植物誌に引用された標本は、かなり正確に同定されているが、中にはこういうこともあるので、気を引き締めて残りの確認作業に臨みたいと思う。

標本：箱根町三国山 1983.6.25 吉川アサ子 KPM-NA1071362; 箱根町駒ヶ岳 1983.6.4 高橋秀男 KPM-NA1071363.

## ヤマネコノメソウは不思議がいっぱい (中島 稔)

今年の2月、横浜市青葉区の寺家ふるさと村の藪を伐採した跡に、突如、ヤマネコノメソウの群

落が出現した。ヤマネコノメソウは、青葉区や緑区などの横浜市北部では非常に稀、永年休眠していた種子が発芽したと思われるが、この不思議は別の機会に…。

さて、このヤマネコノメソウの花、色が薄いので良く見たら、群落内全ての花の雄しべの数が4本だった (図1)。

『神植誌 01』や『横浜の植物』では、ヤマネコノメソウの雄しべは8本、県全域に分布することになっている。手近にある図鑑類の記載を見ると、  
・平凡社『寺崎日本植物図譜』: 雄ずいは8個。  
・北隆館『新牧野植物図鑑』: 雄しべは8本。  
・保育社『原色日本植物図鑑』: 雄ずいは8個。  
・平凡社『改訂新版日本の野生植物』: 雄蕊は(2)4-8個となっている。

「不思議だ」と思い、私の散策コースの各所を調べてみたのが、この戦線の始まりである。横浜植物会他の皆さんからも情報を頂戴して調べてみたところ、横浜市内各所、そこから南へ鎌倉、三浦半島南端まで、雄しべは4本(以下4しべ型と表現)だけだった。市外ではどうかと、最初に高尾山周辺を、また生命の星・地球博物館のある小田原市入生田周辺、その後平塚市郊外でも全て4しべ型だった。山の麓のほうはどうかと、丹沢の大倉周辺、厚木の七沢から飯山方面も全て4しべ型だった。

生命の星・地球博物館と横浜市子ども植物園の標本庫の収蔵標本のものも調べてみた。ヤマネコノメソウの雄しべは萼より短いため、立ち上がった萼内に隠れてしまい良く見えないことが多かったが、判定が可能な標本の雄しべは4本だった。自分では観察に行けない丹沢、箱根方面の標高が高い場所の標本も4本だった。1950年代の古い鎌倉の標本までも4しべ型であったのは驚きだった。

私が見た範囲では、全て4しべ型で、8しべ型は全く見つからなかった。

千葉県で、古くからヤマネコノメソウを観察している仲間がいるが、千葉県は全て4しべ型で、8しべ型なんか見たことが無く、近県も同様だろうと言っている。どうやら東京一神奈川一千葉、もしかすると関東地方のヤマネコノメソウは全て4しべ型ではないかと思ひ始めた。

戦前の古い図鑑、『日本植物図鑑』(牧野, 1940)には、「やまねこのめさう…雄蕊ハ短花糸ヲ有シテ八本アリ。」とあった。牧野先生を疑う余地なく、戦後の図鑑類はこれに従ったようである…。と、この戦線に参加して戴いている城川四郎先生に話したところ、『大日本植物誌』のユキノシタ科は1939年発行。雄蕊8ときに4と記し、「ときに4個の雄蕊を有するもののみ群生」としている。『大日本植物誌』は、原寛著で中井猛之進監修であり、当時、学術的には牧野より信頼性は高かったかもしれない。「牧野先生は雄蕊4個の群生を承知していたと思われるが、8個が普通という表現だから不思議だねー」との感想であった。また不思議が1つ増えた。

一部の図鑑にも有るように、「ヤマネコノメソウの雄しべは8本又は4本」と理解すれば一件落着となるのだが。以下、勝手な考察をしてみた。

#### ① 4しべ型が8しべ型を駆逐した

とするとこれは大変興味ある事実である。セイヨウタンポポやオオイヌノフグリのように、別種が無融合や自家受粉能力を武器に近縁種を駆逐した例はあるが、種内分類群(品種・変種)が母種を駆逐した例は無いからである。

② 神奈川県下にはもともと4しべ型しか無かったとすると、こちらは興味は半減するが、現在まで何故気付かなかったのか不思議である。

この4しべ型が何者なのか興味あるところである。雄しべ4本のもは、古くヨツシベヤマネコノメ *Chrysosplenium japonicum* (Maxim.) Makino form. *tetrandrum* H.Hara という品種が関西で発表されたが、雄しべ4本で小型であるという特徴は、種内の変異であるとして、ほとんど認められなかったようだ。また、2004年、韓国で、ヨツシベヤマネコノメが *Chrysosplenium japonicum* (Maxim.) Makino var. *tetrandrum* (H.Hara) Y.N.Lee として品種から変種に格上げされた。どんな理由だろうと記載文を取り寄せて見た。なんと、雄しべ4本以外に、「雄花、雌花が有る」と書いてあった。後は茎が(直立せず)地を這う…。改めて

観察してみると、同一群落には地を這う株も有れば、直立する株も有る。雄花、雌花が有るということは、結実しない花もあるのかと観察したが、花序はたいがい全花結実、わずかに結実しない花も有るが、受粉しなかっただけと結論付けた。どうやらこちらの4しべ型は、上記変種とは一致しない。

ちょっと観察からは外れるが、雄しべの数以外は形態上区別がつかない4しべ型と8しべ型は、分子レベルでは違いが有るのか、キノコ(菌類)で通常使う手法で調べてみた。関西の友人達に依頼し、広島と山口で採取した8しべ型と、入生田と横浜で採取した4しべ型のDNAの塩基配列を比較して見た。植物では葉緑体DNAを使用するのが一般的のようだが、菌類で最も一般的な核DNAの、ITS領域を見てみた。その結果、広島と山口のものは全く同一、入生田と横浜のものも全く同一、8しべ型と4しべ型の塩基配列(シーケンス)には3塩基の置換がみられた。この相同性は、形態での判定が困難な菌類の世界では同一種とされるレベルであり、形態的識別を重要視する植物の世界でも、参考程度にとどめるデータのようだ。

2月末に気付き、雄しべの数を調べ始めたものの、4月も中旬になると県内のヤマネコノメソウは果実期になり判別不能になった。また、調べた標本は圧倒的に果実期のものであった事実は、いかに「花の命は短い」かと思いを新たにした。

① 4しべ型が8しべ型を駆逐したのか。

② 元々4しべ型しか存在していなかったのか。

この疑問を解決するために、神奈川県下及びその周辺で8しべ型を見つけようとしたが、いまだ見つけることができない。調査不十分のうちに花期が終わってしまい結論を出せない。そのため、この報告は中間報告とさせていただきます、上記の考察を進めるべく、もう少しこの不思議を迫及してみようと思っている。

ただ果期になり、種子を見ていて気付いた事実がある。ヤマネコノメソウの種子散布は、水滴散布の代表例とされているが、それだけでは説明がつかない生態がある。どうやら水滴散布以外に、巧妙な風散布能力も併せ持っているのではないかと、いう事である。これはまた次の機会に報告したい。

#### 引用文献

原寛・中井猛之進, 1939. やまねこのめさう. 大日本植物誌 ユキノシタ科, p.90. 三省堂, 東京.  
北村四郎ほか, 1994. ヤマネコノメソウ. 原色日本

植物図鑑, 草本 (II), p.139. 保育社, 大阪.  
 牧野富太郎, 1940. やまねこのめさう. 牧野日本植物図鑑, p.490. 北隆館, 東京.  
 大橋広好, 2008. ヤマネコノメソウ. 新牧野植物図鑑, p.243. 北隆館, 東京.  
 奥山雄大, 2017. ヤマネコノメソウ. 改訂新版日本の野生植物, 2, p.204. 平凡社, 東京.  
 寺崎留吉, 1979. ヤマネコノメソウ. 寺崎日本植物図譜, p.300. 平凡社, 東京.  
 Yong Lee, 2004. *Chrysosplenium japonicum* (Maxim.) Makino var. *tetrandrum* (Hara) Y.Lee stat.nov. *Bulletin of Korean Plant Research*, 4: 22-23.

## 風祭のハナカザリゼリ (ホワイトレースソウ) 一年後

(大西 亘)

昨年, *Flora Kanagawa* (82) で, 小田原市風祭にハナカザリゼリ (ホワイトレースソウ) *Orlaya grandiflora* (L.) Hoffm. の逸出を報告した. ほぼ1年後の2017年5月5日に, 再び同じ場所で複数個体が花を開きつつあるのを確認した. 直後に除草作業が実施され, 一時地上部が確認できない状況になったが, 同年6月29日には若い果実と花を付けた個体が再び確認できた. 開花直前に地上部が除去されても同年中に再び花茎を伸ばし, 開花と結実を果たすものと考えられる. 昨年と比較して, 顕著な分布の拡大は見られないが, 引き続き, 生育状況を観察したい.

なお, *Orlaya grandiflora* (L.) Hoffm. については, 上赤 (2016) が「ハナカザリゼリ」の和名を提唱



図1. ハナカザリゼリ (小田原市風祭 2017.6.29 大西 亘撮影).

しており, ハナカザリゼリと統一呼称するのがよいだろう.

### 文献

上赤博文, 2016. 佐賀県で新たな分布が確認された植物 (9). *佐賀自然史研究*, (21): 21-29.

## Flora Kanagawa No.83 で公表したカエデ属 Gen.*Acer* についての再考 (追加) と訂正

(長谷川義人)

1. ウリカエデ節 Sect.3. *Mcraantha* は異質の種を多く含み, 下位ランクとして3列を認め, 次の如く区分する.

ウリカエデ列 Ser. *Macrantha* +ウリカエデ, シマウリカエデ

ウリハダカエデ列 Ser. *Rufinervia* +ホソエカエデ, ヤクシマオナガカエデ, +ウリハダカエデ

コミネカエデ列 Ser. *Micrantha* ミネカエデ, オオバミネカエデ, +コミネカエデ, ナンゴクミネカエデ

2. オオバミネカエデを認めて次をウリカエデ節コミネカエデ列に加える.

*Acer tschonoskii* Maxim. var. *macrophyllum* Nakai in *Nikko Syokubutu*, 51 & 167 (1936) **nom. nud.**

此の変種は『日光の植物と動物』(1936; 東照宮発行)に中井猛之進によって発表されたもので, 基準産地は栃木県日光である. ただし, この記載は和文のみのもので, 国際植物命名規約によると非合法名であるので, このエピセットを生かすには, 正式な原記載が必要なることを付記する. 従来, 長野県の文献 (清水建美・横内文人など) にはどの書にも登載され, 栃木県資料 (長谷川順一) も同県のナンゴクミネカエデとしているものは全て本変種であるとしている. 筆者が群馬県内の六合村の採集品や草津町で実見している個体も本変種である. 分布は判明している限り, 栃木, 群馬, 長野の3県である. さらに一般的な認識が悪いので, この変種の分布は周辺に広がる可能性がある. ナンゴクミネカエデは四国産から記載され, 西の方のもの (紀伊半島以西) ではないかと考えられる. 記載では裂片の先が長く伸びるとされるが, これはコミネカエデも同様で, この部位だけ見ては混同する事は疑いない. 生命の星・地球博物館 (KPM) 所蔵の田代信二先生の四国石鎚山の第二鎖場の上の原産地の標本を基本とし

て(註:この標本ではあまり裂片の先は延長しない)今は判断するほかない。ナンゴクミネカエデはコミネカエデとはかなり異なった種である。ミネカエデの下位 Taxa として組み替えられたことがあるが、分布からすれば、むしろコミネカエデの方に親近性があるのではないか。村田 源氏は果時の標本ではコミネカエデと見分けるのは難しいと書いている。これは花を見なければ確定できないことを表現しているのであろう。

なおナンゴクミネカエデは個々の花は大きく1花序の花数は少ないと謂う。裂片の先が尾状に鋭尖する sterile の標本で識別することは、一種の伝聞となっている特徴で実体と比較しなければ、これほど当てにできないものはないと考えられる。

筆者の本州中部以北での採集標本は(岐阜県中津川市、山梨県楡形山、伊豆白田、箱根神山など)、おおむね裂片が延長する標準的なコミネカエデのようである。なおオオバミネカエデは大樹になるので、一般的・普遍的には樹木が古樹・大樹になると葉が小さくなる傾向があるので、オオバミネカエデは必ずしも名前の通り大葉とは限らないことを付記して置く。和名の悪戯でミネカエデより葉が小さいことが多い。オオバミネカエデは果時にも葉柄に目立った毛が相当残り中央の3裂片は伸長する。その分布からしてミネカエデの下位 Taxa のものであることは間違いない。

3. カエデ節 Sect.7. *Palmata* を一部組み替えて次のようにしたい。

A. 鋸歯は重鋸歯 (ヤマモミジは内帯「日本海側・東北」要素)

*Acer palmatum* Thunb. in Nov. Act. Soc. Sci. Upsal. IV : 36 & 40 (1783) イロハモミジ

*Acer palmatum* Thunb. var. *matsumurae* (Koidz.) Ohwi, Fl. Jap. 746 (1953) ヤマモミジ

*Acer palmatum* Thunb. var. *matsumurae* (Koidz.) Makino Ill.Fl. Nippon 351 (1940) **comb. nud.**

A. 鋸歯は単鋸歯

*Acer amoenum* Carriere in Rev. Hort. XX XIX, 280 (1867) オオモミジ

ヤマモミジは従来通りイロハモミジの変種とするが、オオモミジは前2者と様相の異なる単鋸歯なので独立の種としての十分な地位があり、長谷川 (2017) に発表したものを変更した。

4. イタヤカエデ節 Sect.8. *Platanoidea* の一部を取消し、組み替える。

*Acer mono* Maxim. var. *lobulatum* (Nakai) Momiyama **nom. stat. et comb. nov.** マンセンイタヤ

**Basionym** : *Acer lobulatum* Nakai in Journ. Jap. Bot. 18 : 608 (1942) マンセンイタヤ (中井猛之進)

*Acer mono* Maxim. var. *taishakuense* K. Ogata (1964) **syn. nov.** タイシャクイタヤ (緒方 健)

マンセンイタヤ (中井猛之進)・タイシャクイタヤ (緒方 健) は中国東北部・朝鮮半島にあり、広島県、比婆郡、東城町、三坂の帝釈峡に隔離分布している種で葉下面に密毛があり、上面にも毛が様に生える。葉柄はやや長く、葉身長より長いものが混じり、葉柄上部には毛が残る。葉裂片は5~7裂して、時に矢車形のもの混じる。1991年8月24日鎌倉市、扇谷の靱山泰一郎に植栽されている本種を勧められて筆者の標本 No.14134-1~5 を作製した。靱山泰一先生の同定票には中井先生の種名が書いてあった。今回これを *Acer mono* Maxim. の変種に組み換えを行った。

なお、*Acer mono* Maxim. の発表年は日本の文献では全て「1856」とされているが、森 弦一氏から手元に送付された資料では「in Bull. Class. Phys.-Math. Acad. Imp. Sci. St.-Pet. Tom. Quinzime. 15:126 (St.-Pet.: Leipzig) 1857」となっている。この記載文はラテン語6行、ドイツ語11行のものである。中国の方文培 (Fang Wen-pei) 氏の『中国植物誌』第46巻94にも「1857」と引用されている。発表年のプライオリティに関係する事なので、どちらが正しいのか、「1856」に文献があるのかどうか知りたいものである。

5. カラコギカエデ節 Sect.12. *Ginnala* のカラコギカエデの出典・命名者変更 (K.Ogata(1965) → Pax(1886)).

*Acer ginnala* Maxim. var. *aidzuense* (Franch.) Pax, Monog. Gattung Acer in Engl. Bot. Jahrb. 7 (1886)

6. その他

P.1001 上から5行目: *A. mono* の発表年 (1856) → (1857).

P.1001 上から35行目: Sect. 11. *Integrifolia* → イタリック・ボールドに。

P.1001 左段下から4行目: 貨幣→硬貨。

マンセンイタヤ *Acer lobulatum* Nakai の標本資料を提供下さり、この種の同定票を書かれた靱山泰一先生とイタヤカエデ *Acer mono* Maxim. の資料を提供された森 弦一氏の両氏にお礼申し上げる。

文献

長谷川義人, 2017. カエデ科イタヤカエデ節イタヤカエデの学名考察ならびにカエデ属の使用学名提案. Flora Kanagawa, (83): 998-1002.

## 2017 年度総会の報告

(事務局)

2016 年 4 月 16 日 (日土), 生命の星・地球博物館において, 2017 年度の役員会・総会が開催され, 報告・議事とも, 了承されました.

- 2016 年度 事業報告

- 各ブロックの活動報告

ここでは紙数の関係で割愛させていただきました.

- 2017 年度 運営体制

- 2016 年度 決算報告・監査報告

- 2017 年度 予算

---

---

## 目次

佐々木シゲ子・和田良子・野津信子： 横浜市旭区に神奈川県新産のクジュウツリスゲ（カルイザワツリスゲ）.....	1003
佐々木あや子：ハナハギ属ハナハギについて.....	1004
木場英久：箱根にシロバナエンレイソウはない.....	1005
中島 稔：ヤマネコノメソウは不思議がいっぱい.....	1005
大西 亘：風祭のハナカザリゼリ（ホワイトレースソウ）一年後.....	1007
長谷川義人：カエデ属 Gen.Acer についての再考（追加）と訂正.....	1007
事務局：2017 年度総会の報告.....	1009
編集後記.....	1010

---

---

### ●議題・報告

---

---

### 編集後記

Flora Kanagwa No.84 をお届けします。事務局では、今後、新しい植物誌の編集、版下作成に忙殺され、今年度、最初で最後のお届けになるかもしれません。次にお届けするのは『神奈川県植物誌 2018』になるとよいのですが…

(田中徳久)

#### 神奈川県植物誌調査会

〒 250-0031 小田原市入生田 499  
神奈川県立生命の星・地球博物館内  
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846  
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp  
郵便振替 00230-5-10195  
加入者名 神奈川県植物誌調査会  
年会費 2,000 円